四四郷談八全

へ13
196
8

へ13
196
8

西上村
本重
大川宮
ベ13
196
8

皿皿郷談巻之八

東都　曲亭馬琴編演

第十四　三度駭て怨ふ報ふ　正禾時忠ゆ逢途の戯謔

渡鳥ハ缺皿ぐうちに竜られ。その夜より暁ゆけていも寝ふれど況や郷国ふ住境ふいれ。しふ胸つぶれて。まづ真吉ふやあふたび彼君ふ告ふうさへうとおもひまづ。ひつちそろ。ゆ人の伎倆ふいとぶしく。あろまか庫の中外ゆ。訪をやとてその夜更。闌人定りて竊ふ臥房を脱出つ。庖湢のうさより彼処とへるふ。戸ハ閉なの〳〵燈の光ゆて挑ゆふそふ声。しうり吐嗟と匂月ハ騒げども敷皇さび怪我ゆやあくんと。ふひ詰あて足を翹徐くふ戸只立ゆりて。ゆれば濆ゆみ。推測ゆとちつれども内より鈎を掛ゆうんひぶくべうもあぶざれ。せんとぶ絹て耳ゆ。ゆそのいつよしをゆてちうさる行ふ缺皿ハ窮るの羽ぶひの下ゆ伏を鞠まうなり内危く

ともいうぞとのふんを汚さんやと声あり絞れば沸くる汗も涙も焦熱地獄冥府の
呵責眼前人の心の剣の山々〳〵殺せと又とゝふ舌は噬んとゝ云しゝ天日
法印浄弁は慌忙きまゝ拭を口ふ銜る猿轡禁足と引締冷笑し缺皿且く意
犯よ養母の叔父は大叔父と三才児もちれる服忌今そはらでものるゆゑ和女郎は
愛を失ふく親は勘當せゝれーけの何禁忌と繰よーあゝん男ぶ兵士ぶ外婦
あり年少なれば深気なり朝寝夜遊夕化粧或は世帯をうぶ物自おのゝ氣の
隨とうの月日を送る女房は年の相場のる下を厭ど老る夫あの徳
なり四十の秋〳〵妻ふ後れく三年来鰥住今は隠居と呼れるれも昔は
花ざかり日高川まで清姫は追慕しるもあゝふびやは塩ぶ焼く死ーかせぶもれ
ぶもこの処は固より人は住ぶて甫の外は友もあーあんいさゝや缺皿姫木くゝ落
〳〵ふ装束かゝる難気も才の為とゝひ不て床の海屏風の浦へといちぶぶハイヤ

と雑と歌ふ文は鼻ふかける酒機嫌誘別荘へ引もん玉の輿ふ行ぶみ
と向上る梁ふ古葛籠。見究竟と引あゝ蓋推開て抓出を惜字帝はその巣と
ゆぶ〳〵見紙魚は逃ても缺皿ぶ脱る〳〵途ふ〳〵ぐゝ葛籠へ抱込入れられて出んと
悶掻は浄弁はまゝ蓋をうち被せて四ま引結び肩入〳〵ま担ぶ傾けども。
膂力は今ふ衰つゝ〳〵軽るよ肖員揚る右まゆ燭を引提て内〳〵ふ
戸を引開出ると迎と浅名は半もるとさゝ後ろ。葛籠の幼と云ゝ様り。
とは狼籍やといろけもゝくを吻と吹滅さま燭と揚て後さゆよ排退け走て
出ると又引留るかしるれ女子と侮りぐゝれとゝ差の眷中に童ゝ〳〵ゝ〳〵
よろ〳〵と倭僧ぶぬり返り排へぶ退れ引ばけ入り打〳〵打ゝ階
ゝ〳〵は足音ふ伝境は聯ゝぐして闇を掻捜り走り出ふ涙
輪ゝる細帯投捨ると潜り脱ても如法夜の足下奈ゝく礙と突膝立

あの母をとをせ〻と抓かゝるそゞ隙ふ浄弁いちゝゑく。案内知うる角門を
蹴放をゝく推開て足ふ信して走去る波る頻ふ焦燥て枷ふる片埦を掛
退突退る剽を撲ゝて倭僧をえゝくりもせゞ追蒐ゝゞ。ゑい推とゝんと片埦も
喘く追ふ行ふやうゞ茅を背ゆして里遠離る新利根河原須ふ四月晦日のこと
なれゞ卯花降霽ゝゞ。呂悪もうるねくふれ夜ふ岸うふ涙の音高く居越の
鳧の羽ゝくのゝゝや渡るゞ往方をもふゞ走り倦ゝて立在ゞ遥北る河ふと
ゞ〻く浅ゝゆ大叔ゝゑ情欲ゝ利欲ゝ恋ゝ縁方人あれゞゝて継橋氏ふ
ゝりの骨肉その義を推せゞ再姪君ふゝゝかゝね横恋慕横紙破る反故
葛ゝ紙へゝら納ゝ走ゝゝも何処ゝでゝ外ゝとゝゝふ正〻波るゝ當下浄弁
冷笑ひゝゝゝ女ゝゝゞゝゝ親ゞ許して妻ゝる鉄皿ゝゞ女房道具と轎子ゝゝ持
る葛籠も竹の多ゞふなる舌切雀の塔引出ふ宿ふ何処と跡逐ゝ鼓ゝ萬貫労

〻く切ゝ〻差樹もつゝゆゞ先塔ゝ途をゝゝゝ。と刃を反ゝゞ前ゝ遠て推戻をゝ手首
ゝゝ金て標揚ゝを流ゞ外を乗月車推ゞ跌ゝゝまれゞ縋る目さゝも烏夜の素打引倒
さゝと渡ゝるゞ雑ゝ葛籠の索ゞゝく浄弁ふ前ふ伏葛籠ふ川ふ人りゝとふ落る
水音叫ゞ声。ゆる悲ゝゆと渡ゝるゞ続ゝ孤必水竹ゝゝ立ゝふゝゝで早河の瀬ふ
砕ゆく主従ゞ哀れ墓ゝゝ最期なり。片埦ふ此彼の声を御導ふ走り来ゝゆく
近づゞゞ忽地ふ叫び泣声頻ゆゝて。水音ゝるゝ〻ゞゆゝ。叔父公
叔父ゝゝゝゝゝれゝゝゝゝ。ゝゝ迫ゝゝ狭。入水せ〻狭ゝ〻応ゝゝゝゞゞ。呆ゝゝふ
半晌ゞゝ。心ふゝふ安ゝゝ祭ゞ。叔ゆゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ。
叉三の比宿所ゆゝゝふ奴婢ふふ後ゝゝれゝゝゞ。その晩方ゝ浄弁ゝゝ用ゝ
より潜ゝゆゝ。片埦ふ立間遥ゝゝゝふ入れゝ額を合ゝゝゞ鉄皿ゞゝゝと問ゞ浄弁
苔ゝ。新利根河のほゝりゝて渡るふ柱られ竟ゝ葛籠の索ゞゝく。鉄皿

河へ流しねとそを救へと渡船も推続く乱入りぬこの沸を禁んとく湯を加
より拒絶く主の命は沸も救へぞ。みづからの死を急ぐ惜しべ死は缺皿の
獲る黄金を淵へ捨ど宝の山へ入りぬ。まと空くへ沸じとて流れ沿く
海鯛ふるれど間へ入し瀬へ早し。菖蒲を柩の水葬に寿永の憾曲水漫人
無益の殺生しけり。と泣を撞つ物ぐれば片埴ぬて嘆息し。吾俤も亦渡船を
追禁へそ河原まで不覚ふまりゆ死ぐどいと暗くれば其処ともふぐと只
水音の異なるを覚て仏へ安らんど。ちぐ人身をはうけれども応しうまう縁
久。
弱り弱て推量ュ一点違ひと缺皿へ葛藤ぐふ義を水屑ようしとて惜む
ちへ幸へ但渡船を殺せしの惜しべ憾べ彼女の子が従兄宗ろる。真吉とろ
ふ壮佼へ正禾殿の出臥へ。さゆふやま狎著て紅皿が媒妁ふせぐやとちひし
ちぐ仕りその故へ如此へ間様へと密語べ浄井且く沈吟べ紅皿が為ゆへく。

任用せしるのありとのやとも一大事を知へる渡船自滅せばべ仇とるりなん。ちれ
どもあ月計策あり。渡船が彼情願を。そや真吉ふ告へべ。如此へ〳〵ふ語り
ぬ。のしまと生ぐどべへの婚縁輒くい成ぐ。さはへ〳〵へ間様へと耳へ引よせ
説示せば。片埴へはう笑て只顧点臥密語へ人りやえんと潜ゆふ浄井ュ入し
そり。かくて天へ明て素大夫臺より退へふるれば片埴へ忙へく閑室へ迎へ
入れて拙へ泣へ。と顔ふ袖を推当てよへと泣べ素大夫へよく泣りてちぐく
風れて目を拭ひ可愛さあまる抗拙へ人の懐を入りんぐ。儀へそくうさへと
ちふふひく鉄皿へ昨宵私まと走り出れそを償へ渡船へ渠へも紀主敬のうへ
その乳を不精へ付れど。かくあべへとちひうけど仏故へ土庫の鍵を盗へ
付へ。さりとて往方へ定らなへ。いふまべそと。といひあへ又階鉄と泣へ〳〵宗大夫
やメてうち驚へそへ安らんねふふそかくまで大膳無敵の女児走るとも外へとも

妻なりとも惜からぬ縁ぞ。この家の血統といふハ渠のミなれバかゝる身となりし人に家ハ嗣せんこと久しく近護
守へ申さバ父の不幸なり。且かの如く浅ましき事をのミなし往方を定めず。
缺皿がうらみハさもこそあれ。稚き時より使ひたる渡るさへなほ余りに迷ふハ過世の業
因欽子にハ親に似ざりけり。彼ハ恥辱をもかへりみず何をもかへりみねど只面をのみ
といふ声頻りにうちくもれ室を瞻望して嗟嘆せりかくて旬日あまりを経て師ぬ。
有一日真吉早く渡るにむかひいふ片蜿ハ園宅の蔵護に彼真吉が率ゐる
ことありしが如此くに回答して吾倚よりハせよと豫て分付おけてしハ炊妾
躰よく出迎渡るどの上総なる金剛神へ奥さまの代参を仰つけられとの暁に発
足ひし要あらバ宜なれ彼人久しく日に言伝ありとて真吉ハ直に眉根を
よせ実に大事の心のかたなれども委細ハよしひざとしてあり晦日の鳴夜にあるの人の媒妁
せまじと筆談せられしが久しくなるとはいへども聿つる縛夫ハそこの人に渠がなぞハ

不便のことハいふまでもなし。と立もあがらず困果る形勢に炊妾ハ真さらにて胸
ぐるしれるものか。且其処に俟せよといひつけつゝ走り入り縫の結片蜿に告げて
ちかごろ小膝を鼓叔父公が豫て謀りし所一息違ハ奇に妙也人の為に媒妁を
とハ紅皿がなかりせバかくとハ彼日渡るが真吉に消息してこれらのみ潭ふかへん。
渠が入水ハその夜のことゝの婚縁ぞ不執結ぞ渡るが死をきゝしよりも
妨なし。と肚裏に尋思し炊妾を近づけて云々と密語ぞしつゝ果て
遽しく舊の処へ走り出又真吉に密語つ客房へ誘ひ入れて障子引き退れね。
且して片蜿ハ伊豫簾を捲入りて真吉に對面し名ハ豫てより聞つれど始めて
逢ざりし渡るが従兄弟と聞バ懇しくおもひし最に一別れし媒妁せよと云ひつるの
ことは侍らぬものや。わしもよく渡るが在しぞも吾倚も安心いたさんと親に問
ふて真吉ハ撞既に稍させまゐらせ人ハ悪べきものならず彼日渡るに宜ひしが。

その日直さふ吉ふ〜なれば時宜を求め方便をめぐし。潭ひ凜せてはひ父ちうれども
彼壻君ハ狐疑〜あふと甚〜〜只そゞ已とのこもゞせば。初對面ゝて肝要なり。
その夜ハ舅姑君も。努ちふねもりちゝて。閥窺ゐどちうゝべゝふゞ又使ゞ〜人ども
席を避ゐゐゞゞ。壻君愧て忽卒ゆ辻ゐゐ甲夜ゐゞゞ潛ゆふ某ゐん
俱つちつふん式の盃ゐゞ首ゝて直さゆ閨へ入れまゐ〜せ三日の夜の比及ゆ。
巳對面ゐゝ已。かゝて口説せゐひゐゞ公ゞちて婚縁ゆ執結びゐゐんと何疑ひの
いゞ兄但渡ゐゞちゝゆ在ふゞ。その夜の分孫とゆかゝゝ伝ほ」と思ゞ巣ゞ還ゐを
俟ゐゝさられす善尺麑とゐゝゞ後日のゐゆ肯がゝ。けゐ翌ゐゝゞ日子も吉
いゞゝともん回答をうけゐゐて謀ゞ。と真成ゝ速〜ゐゞ片埴ハ笑片向て尾花の
ゞくうち点沢そハ耳ゐりの飲び。左金ねゝ紅皿をまゐ〜ゝゝゞうハ願へども大家
小禄その差ゐゝゞ尋す常ゐる媒嫁りて。ゆ入ゝゐんゐ〜もなゝ。ゆせゝ。かゝや

せゝ。とゐゐハ親の欲ゐゝふゞ。こゐ郎ゆあゝがゐゝ。覚ゞ情願不便ゝ。成ゝこの
あゝんゐと渡ゐるふ相潭ゝと身ゆ引受さゆ和殿の親切ゐゐゆまゐて速ゝかゐゐと
ゆえのふ飲び辞ゝ竭〜ゞ。いゐゝ所ゐゐゐゐ佑り。善ハ急げと世話ゆもいゝゞ
渡ゐるゞ還ゐをちゝゞ。今宵役壻の刀祢かゐゐせゐゝと邪ふのゝ手ハ長ゐもゐとゐ子
足ゐねのゝふ佑りてん執成てゐゝゞ。さても和殿と労〜ゐゐ。紅皿ゝ對面〜ゐゝ
といひゐゝゞ忙〜く堂とゐち鳴〜人を呼て真吉ゝ盃を勧め紅皿とゐ生〜て親子
叮嚀ゆ歎待ども。真吉ハ今宵のゐ壻君ゆちうさんとて遽〜げゆかゝゝけ
さゐ行ふ片埴ハ猛ゆ婢どもを呂聚て鉄皿ゞ子舎とかゐ拂ハせ味噌子ハ隠子
そゐゐえよ奴隷ゐハ風爐を焼せよ紅皿ハ浴ゝ入りてゐゐ〜流りゐゝゞ。あゐいそ〜や
盆も正月も一時ゝ来ゆゐるハと喇犯ひつゝきくその宵の儲ハゐられどこの日
あるゞ素大夫ハ墨の勤番なれば墨をゐゐゞ。どかくゐる待ゆ日ハ暮つ。短夜ゐゞ

岩橋北よる乃
ちきりともたえね
ゑーあるるゑむき
こうふ弐の神
べゑ
片りひ
左りん木

人を使ひ。と長に心持をあり。浩処み真吉は庭門より衝と入て宮内へ
紅皿は豫てより。ふひ設さるとるべく今夕は胸裏に秘て後巡のときそれば片埦
立るべくとせよ。知せよと密語あくさ。そぞ〳〵奥へ躙れ入るる紅皿を見て飾
錦を裝ひつ。今宵と晴と打扮る。時勢粧想像ゝ且して壻君は百大吉
先ゝとして潛ませり新しき衣の音さやくとして儲の席に居とゝれども。
紅皿は愧ぢるこて定りゆんざりけり。配後の婢们は裡面へ入ぶ障子の外面
よりけらひを床を真吉ところ行く盃盤を受とりつ。形のごく祝ぢのさるべを
勧ると。嗣嬢さる婢们忍びあくぞほく〳〵笑ふ紅皿は笑れて胸くるしくて
限り色。うち咳くゆるゆして秋波ゝしてまたゝれば。〳〵ゆ似るべうもあらぬ。
いとゆるなくゝ込べども。おのゞ心の惑ひ。ひとゝうひくしてゆるびゝ入ぶ弐果て
真吉は盃盤をとり納めて婦と臥房へ冊に入る。早ふちん迎よまふんとて。

退ゝ入とする婢们ゝとゆる客房へ誘引へ。片埦みづうち東道して饗膳をべく
叮嚀あり。夜はいく深れば。ひく〳〵して暁を待つなるべ。かゝ巳ぞふ紅皿ゝ
臥房へ入りて後壻君ぞ物ひ〳〵ゆふその声銅鑼を鳴ふ似ゝり江湖上の
物語ふ。透句を雑へて。真ゝ慰やゆべども。鬼を捕らるゝ巳て果敢〳〵ゝ
恵をゆせぞ。巫山の雲楚甚の雨ぞふ似ゝ。ゝ地死ぬべく
苦悩それども。身の果親の為とうち念じ。ゝ。八声の鶏を鳴
東の山の挾ゝ比真吉は壻君をいそぶ立て。倶して生づ。又翌の宵とゝ
かりるひれ次の日御書ゆる。真ゝ大ゝ〳〵めぞ。片埦はこれをゝ欲ぶこと
限なり。ゆぞて返翰ゆえさとされど紅皿は楽しまぞ。その夜も又かゝるひ〳〵ゆ只
見るゝに真醒ていと疎〳〵くゝべども。「ゝび臥房を共ゆ来れば。今夕ゝ如此
と母は告るゝ。ゝゝ屏風の内ぞ入れ。今宵も片埦は真吉を推ぞめ

させて通霄饗應を大かたハ前の夜とおもへど筋なれバ綷省ねがくてなほや弟
三日ふありね。この日片塊ハもしれて綷の趣を委細よ良人ふ告しらバ。素大夫笑て
賞嘆し。ある怜悧ハしくも謀りあらね正禾左金を壻よともふが世ハ只おのが随る
ざし。是裏ふこれ不思議ふ宝刀をとり復して本領安堵ありされども。近習の列を退け
られ正禾殿ふ属られて遠境を戍るよりて威控られてしかも似ざりと口をしく
見ども昔よなべ係よりも勝ばし。あらはよ五倍よ百倍せる。彼大人の通家とあらバ情
愿ハ皆稱ん今宵ハ席を改めて壻殿ふ對面をさせふ。その要意致しあると辞
立して回答されバ。片塊ハあくり貞して庖丁を招き献立を指揮し魚蔬山海の
珍味を求める。庖湢の熱閙いふばかりもあらばと思ふよしのなられども壻君ハ
今宵も又真吉とのを俱してひと寄しより来るべバ。味噌平を糾くられ麻の
上下して出迎へ書院へとて誘引ね燭奴三ヶ四ヶとぞらぶふもえられバ明たらと

白晝のごとくていと晴がまし。紅皿ハそれや出迎へられど芫尓ともせず夫のくらを
背ふして只管ふ嘆息を。今宵の饗膳。種々手を盡して婢們僉配膳を且して
素大夫夫婦ハ礼服を整へ小素太をゐく。その席に著とらんぞバ女壻ハ左金ふ
あらバ鼻ハ横ざまふ闊りて。その大きなること柘榴三四ッ束しどく。額ハ廣くさし
出く腿ふ眉を重ねるふ似くり。眼圓よ唇厚く頤細りく齒を長く色黒しく。
侏儒なり。是ハあまり甚麼人ぞいねる手素大夫ふとこの地の勤番とらけくまり際
政田左文太をするち是く半面をくぐく鼻なれバ。人渾名して今道鏡と呼び。或そ
王の鼻ともいへて年既よ三十餘才只顔妻を求ぎども人僉凄が鼻ふ怕害く婚
縁を結ぶりのはし。痛しいる紅皿ハその年既よ十九なれども室の中なる梅より痩さり
羞るそそ幸なれと片塊ハ舌を振ひ。素大夫ハ直と呆れて眼を睜り。身を反らしこハ
皆しふも似ざるりのかな。紅皿が恋壻ハ。正禾左金のねしもと。片塊ふハいひたるふ。渠ハ

政田左文太郎世子王の鼻今道鏡とて仇弾き廃人を引入れてねうらせんと声ふり
立て罵れば紅皿いつぐ夫の左金ゐ〻らねゐ賀つぶれてこれぐる隨神樂獅子が化
しるどれ目ゐ鼻ゐ腹さしく又そづゐ〻〻てや話ね若しそも親のゐ身のゐる
そひしゐの化ゐりたこいゐせんいゐゐせんと身を投伏て泣しぶ片埒ハ怒まる目尻
引立つ真吉が四月前金を席を鼓やよ媒妁の横ゐりの吾倩が憑をゆメえしそ
正木左金とこそいひつれ似ても似つかぬ悪人のそうも鼻さ人ゐみゐゐねを正
ちげゐ汲引しを可惜女児を撫物しせられん堪忍ゐゐぶ初枕の次の日よを
紅皿が歩行ぎゐ日来ゐ異ゐをちゐ〻ゐぶ〻ちひしゐ歩の運びの自在ゐねも
あの鼻ゐ丑ぶ〻ちゐ〻舊の女児ゐ恥やして返せゐゐ腹さし朽を。と恥を忘れて声
高ゐ責絢丑ぶ婢們ハ共ゐ呆れて顔ちまりり。左文太ハゐを又ハ低くゆて
ちり。竊下真吉ハ騒ぐるれを公〻呵〻とうち笑ひ宣ふ処ゐる程ゐ濱ちぶひ

ま〻ゐる。方ぎゐの恋塔君〻則政田左文太ねしゐ。ちが主人左金太郎ハ近曽
妻を娶りゐ人ぶ故ゐりて世ゐ披ゐゐぶそゐとまれかくもゐれ渡ゐる書翰ちゐあり。
これ尚ぶと推固ぶ。かくゐぶ平しぶ澄据ゐれハ某が恨ゐゐふぶ。ゐは疑〻ゐひゐぶ
浪ちゐゐゐる比ゐり渠を上総より戻して問せゐゐぶ分明ゐゐん抑此度の媒妁ハ
某が微力ゐ稱ハぶ。よりて密く主人へまゐ。実ハ左金が媒妁しれハちり偽りて
宣ふ。を巨細ゐ主人ゐ説ちゐせん。ゐゐる然ハ受られぶと窘られて片埒ハ再び
呆れまぶしつ。含まる拳のそぶちゐふぶ威勢脱て阿容〻〻と引退げば左文太ハ
刀掻ちり反ちちゐ〻。ゐれハ固ちり息女ゐ意ぶ。そゐちゐ招ぶ。その媒妁を
捻家の嫡男正木殿主従ゐ。そのうきれて斯ちゐちゐぶ婚姻三夜さゐぶ
物ゐら。その人ゐゐふぶとそ嫌ゐ〻〻のゐゐゐぶ。今道鏡王の鼻と嘲られゐゐ弓矢
八幡武士の瑕瑾恥忍ゐ〻ゐ。ちれども一旦巻山と憑ゐ〻人を娶果さんハ愉ゐぶ。

されどとて今又如何なる存命ぞ。死とても妻の家只此まゝ自害せん。
又惜さのひとしほも果ぞ。刀を脱て腹肚へつゝ立んとすれば素大夫片塊左右
より慌忙て推禁め憤ることなく。その死を惜ひゝ和殿おく
れて自殺せば。それ又後難脱がし。且この刃を納まゝと賠活つ縣しつ辛ぞ
刀を奪ひて。鞘に納め夫婦席隅に退て密談淳し。時を移せば。左文太が焦
燥て。再び死んと推祖ぞ。真吉い走入て。ゆう主人に告んとの夫婦とは
忙きぶりて。舊の処へ入り半。左文太に對ひくらはう。実この婚縁い正禾
左金太政田左文太。その名の似通ふ実誤とて。既に三宵の好を締ぶ。これ俗に
いふ通り縁とを今又正にも。元の素撲になりいせで。うき恥を明くとも。
女児ひとりを乗んのみ紅血も恨とのみ。凡夫婦の情縁い神の結ぶ世のひとしべ。
ひとつ所あらぬ。おのが一期の貧之籤ひくあ引とは時宜とは。則

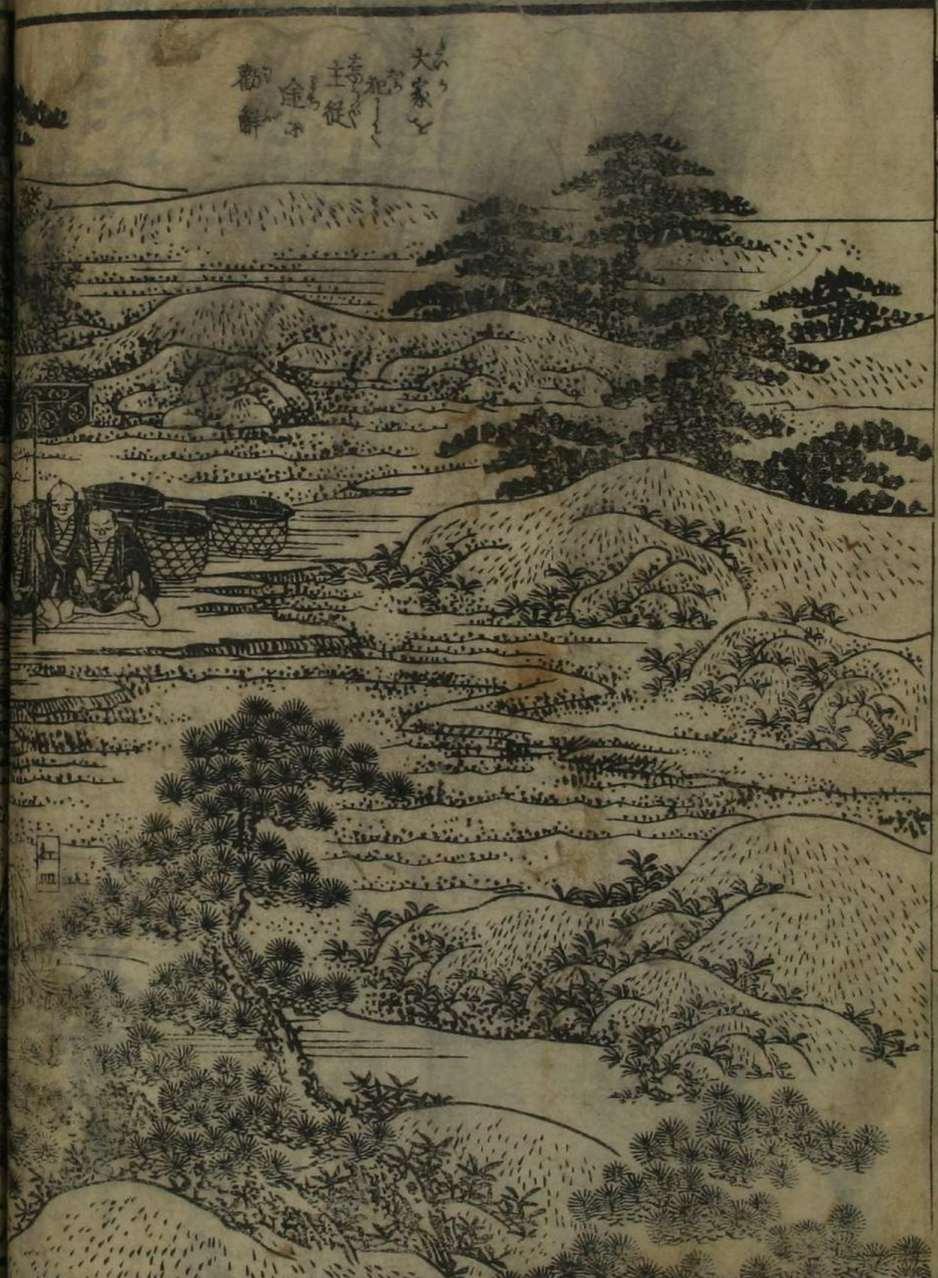
神謀りゆとうれとあぞめんぞうん。何とも親のみと思ひとして嫁りあ入ゆよ
泣とうんと叫る父親慰る母い計校齟齬く熱腸を冷るよもすがらくり入ぞ
鉄血と涙ぞ流せしるを真吉いとも知く主の左金に密に告人の中なる馬とふ。
左文太を媒妁して紅血に辛とゆうん。赤恥を輝とるん。暗に怨を復とりの欲
左金太郎と左文太と唱仰られば。ふゝ伎倆の胃をかれしゝ鉄血いとられ
かくまれ波ぞるゞ入水せどべ。実にその名の錯誤ぞりとも。又せんとべのゆえ
りのを渠ゞ死せしい親子ゞ不幸。形ることをちるよしあくへけすでも鉄血とち
ゑむくべとゆと。後悔慚愧いべえゆ。いつ移べ胃の苦悩て只真吉て然ひのと
かくて止べてとなくゝ移べ。素大夫い女児を喻し。左文太を慰つ。血涙改めゝ
素の好を結べ。真吉い扇を把て。猿楽の小曲に千秋乐と祝げども久後を
いつるべと。素大夫い苦笑して盃に納めゝり。かくて後真吉い喜びるりね。

左文太の夜に日ふかくど。紅皿の地つぐ〻ふ〻しとそ。ゑとろ夢ふ沼仏ねとそ。見は聽さで
寝て行ふ。紅皿が腹太ぶふ〻ろね二親いとの形勢ふ〻ひ〻ろ脱ろ〻途ふなひとと。
分娩ふして送者りるん。まろ羊の秋まぐいとそ。ろ見は隠せども人命ろれつ。あざみ
笑ふと限りは。ところまろ行ふ今茲い暮て明ぶど天文十八年の夏小素太ふ騒乱
ちろ〻。その夜暴ふ牙まろりね李子い血餘とる唱く。親の慈愛大うこう〻ねりの
ろるふ況や見い只ゑとろなる男児の。ちろも八才すぐ健ふ生育ろるとろひがけ
な〻。喪ひつる二親の臧〻ゑ比ん物もるる。片塊い泣明〻。泣〻ひつ〻魂みる。七月
十四日の夜紅皿俄ぶふ産の気つ〻く。生まれ〻女の子ゑ。面影い醜ろぶ。左文太
ふい月ざりけりとそ。食とれをのゑ欲ぶもをひ。そぶ五十日の祝ぜ〻夜左文太い
い〻〻酔ろ。おのぶ宿所へ帰るとそ。新利根河へ滾落ろ〻死ふ。嗣べれ子なけ〻ど。
その家断絶ゑ。日来い只疎ま〻とろひつる紅皿も浅三猪ぶろ送ろ〻ん〻ゑ。

墓ふ葬りるぶとろふ。乳母ぶ懐ふ抱〻る。赤子と人いよ〻〻知りて。王の鼻の置ゑ産
彼れ人よと指〻罵る。ひと新濃ろれい途ろ乳母を返〻ろ。こんそふ彼此ふ問声〻て。
世の胡慮ふろふけり。是ろ元片塊い叔父天目法印を別荘ろ招ひ〻ろ。かの
壁ぶふの潜乱を腹ろ〻〻ぶふ流ろ〻ゑ。又計策をゑ〻ろ浄弁只管嘆息〻。寝ふ
和女郎ぶ推量ふろぶ。濃ぶる入水せ〻と真吉いゑ知りて。そぶ怨を復さんとく。
陥を造りしるふ。さぶれとそ彼壮夜い。正未殿の出ひ人ぶ。今ゑふ何とぶ。
過世ろの縁〻ろふそ。左文太沉壁ゆ〻ふ好も又も男子ゑとの外ふい術ふ〻。
憑〻げふ〻回苔〻ひふ〻ひなる〻てさそ止ろ。かゑてこの夏小素太い頓死〻。
女の子を産ろる。左文太ぶ入水〻ろる。痒ひろとして三年ろれい鬼ゑ嘉〻ゑ。
世ふ公ふ〻なりて又浄弁を招ひて。後の吉凶禍福を問ふ。熟〻著を推算ふ。
安排。白果〻眉を頻ふ小素太ぶ早世。左文太ぶ狂死。みる是物の怨ろ。

とれを禦ひごび後又禍あり。やせん努慎まるべしといふ。いろ〳〵所業ことごとく合
をあつと爰ろ。左文太が新利根河へ流死して死さるゝ鉄四郎が霊ふが霊み祟られ
けん。小素太が暴死さるも。平ゝあらび。維たりのふ名あり。鉄四郎が母さへふ。
ちゝ稱ゝも崇まる狀こゝ。いと頻ゝ怖れつゝ。まく。浄弁ゝ秘法行せて唐草
紅皿ふが為ふ災害消滅怨敵退散と祈るりのゝ。手ゝ為ふ良人ふも清るてこと
詩ぎり已舞衣丁七が墓へ亡日毎ゝ系清して。叮嚀ふ香華をゝ向又鉄四郎が
為ふ。経を読せうどそれふ。ちびく清る人ある狀彼墓ふ莽草の絶ることを。
こゝ素太夫がゝ向ゝふんと。推量ゝいと妬くて。手僧ゝこれを身れば。誰ゝふ
ちゝふび。いとゝろ死女子ゝ。ゝり清る日もあり。又一人清る日もあり。ゝりて彼墓ふ
一日も莽草ゝ絶ることゝふ。片埴ゝ。ゝのあくど。毛骨忽地栗起て。こゝゝるゝび鉄四郎と
渡るが鬼魂ゝふんゝ。ちゝふびこの墓へ女子の清べゝもゝ〳〵ゝと。ふゝとゝふ。

決めて。ゝふ〳〵その菩提を吊ね。ちゝれどもゝ崇まるゝ。天文十九年の秋の比
唐草が良人畑之進。假染の病者ゝり。陰症の傷寒ゝとゝ。四肢厥冷。
その脈微ゝるが如し。渠ゝ苗頃ゝ監が最愛の一子ゝるゝび父ゝさゝふなり。唐草ゝ
昼夜の看病懈ゝらど。鍼灸茶餌ふ良医を招して。周章一家を動せども。ゝるど
回陽せどゝふこの故ふ片埴ゝ又一層の患苦を倍ども。素太夫ゝふ年。
小素太郎を喪ひ。ゝり只何ゝとゝく朽朽く相潭敵ゝゝゝ。忙
まどひ。みゝゝ苗頃が身ふ赴ゝ。両三夜看病。或ゝ紅皿ゝ。ゝ
ゝり。かゝて八月十五日。唐草ゝ親ふへ使を遣して医療の功験神仏の利益ゝ
空ゝ。畑之進が病著大ゝ。ゝゝ。けゝ床微の祝ゝ我ゝゝふ。ゝ
佐ゝ祭ゝ。結ゝるゝん。紅皿の君ゝ。ゝふ。ゝゝ。片埴ゝ。ゝ。その使ゝ
返ゝゝ。紅皿ゝ。親子花ゝふ難ひて。味噌ゝ。俱。奴隷ゝ。一統の



鮮奥をうと。苗頃ゲ芽へとそ赴ょげふく弘法寺の法華經千部供養のりとく。
糸詣群集途去めくど例年ゐ四月の上流ゐ七千部の供養ハめうれ。その
時うくねいうゑ仏ぐと。こゑ必旅うあ狩臨時の法會うくべられと親子うち淳
はくゆく行ふ大家の奥方とおぼしくて。緋の油單をる一對の挾箱を先ゑて。
ちぐ依うけう薙刀をうと。紋天鼠織ふ卷〜さう浜乗物の左右ゐハ老う弱た。
従者十人めまり囲繞しふ前駈後徒のいうゆげる幾とうふ限りもうく。稼りて
前面ようまふうり。片塊ゆうこれをうそ。ある目ぎ色。とれも弘法寺詣なうん。
正未殿の新婦ゐ前狩ぢうらゐ多くあるべうもおぼえど避く融せよ。ふれるせそ。
と奴隷をえうう。走りうえとゑ行ふ。ひしも秋のるるれべ只一條うる畷道を。
半ハ掛稲ゐ塞ぎてる。きのふの雨ゐ途さえねうて踏迎む足駄の歯ハ抜けど。ゑ
頻ゐ忙る隨ゐ紅血襪と跌ひく。さと蹴揚る溜水彼乗物のアゆかりく。泥の

津滴落輪添の後者ホこハ狼藉やと散動ゑて。片塊主後ゑ推取巻誰殿の
内室令愛ゆゆゆうん名告ゆと。教圍べ紅ゐそ母ゐ顔ゑ王のどくなりく。
おりゆど其延ゆうんゆるべ味噌平ハおそるく。進ゑ出く泥ゆくるをうゑ慇懃ゆ。
勸解うを聽うど五六人。肖一刀の反うちうけ。當城の主正未殿の世婦うく宿願
をゆーすゑゆよう。いゆる沈よう弘法寺あく千部の法華經を流ーゆのゆ則結願
供養の為目今彼延へ赴ゑのゆ途の狼藉ちうゑ仏ぐと。送恨ゆりてうゑけのうん。
誰殿の内室ぞや。姓名を慮くうゑ。いよく以疑ゆーゆゆぞや。と連問ハ味噌平ハ
おそれ惑ひくゑゆそのうゆ所をちうゑ。縛くゆ難気ゆ及びーゆ片塊ハ已ことを
仏ぐど。味噌平を退うて紅毋りゆ兵阿容くくと。泥の中ゆ小膝を著途のりくとゆ
ちうど無礼ゆうぞく意趣の仕ぐゑ。乗物を汚ーくゆ。急扶いかくのゆく。後者ホハ
さくく。吾們親子面を曝ー膝を折泥ゑ塗れく賠詫ゆる数ゆくねども良人が

姓名これハ許させ給ふべしとうち歎けバ味噌平奴隷ハ泥に額を摧埋め御慈悲
御慈悲とゆふ玉の庭に出ざる蝦蟇四肢まどかに畏るゝに正木が従者らみゝる
中に一人高く冷笑ひみづから名告るほどこそよく認りてゐたり立入らバ縛の趣
詳に左金に報知らせ正の殿の指揮によらんなんその時陳じのがれとひしまて
片拠紅皿ハまさしく驚おそれつゝ沈状撲て入ことが是則真吉なり憎しと
いへどもうち著にもめのゆふしのあらざれバ顔うち覆てよくもみえど霎時駐る乗物の
内より心もとなき光景を痛しくおもひ給ひし真吉を近づけて物体なき所行なせそ
姫御達を泥の中にはき給ふとやハある過失とハいへど咎めるよ霊場佛地へ
赴く折良人の袴を泥に染ぐさる所行をせバ罪を倍さん御達を勦りまゐらせ
まぎらはしこえなかりけるのみと叱らせ給ふ其の声ハほのかに聞えて真吉ハ畏りて
おん轎遣れといそがせバ従者ホハ又列を整へ弘法寺を投て練りゆきぬ片拠ホも

忙然と見てこれを目送りて真間手河ぶる落魄の姻が漏る心持しつゝ立て居
彼新婦の前の声音ハ鈇皿に似たりけり顔ハ殊にれ也又彼怨長が乗物に馮て
吾侍に崇る坂とおもひまどへバうち驚く胸ハとふかく洗しく誘ひ味噌平と
奴隷に腰を引立させ片拠も紅皿も共に紅裳ある衣餝りし草衣ハさらに下襲
まで腰より下ハ泥に塗れて水の泥の蓮に似たり彼此に立在くとも見る
ものの堵の如く目引袖引指してうち嗤と笑ふ里の総角牛打童ハ近く進
よりて掌うち鳴らして雛もあり味噌平ホハ拭ひがたくて額の泥を拭ひあへず
錆刀をねぢくけて追へバ迯散らよ雛し立さく笑ひ散動なり主従ハ腹の立
立ど当然なる恥よりも泥を雪除よしもなく衣替とりに遣るも人ぞたしなければ
とく此を去して苗頃許ゆくべきもあらんどこの処より狭らんとて駆と踵を旋せバ
跡踉き来る里の童に途まぎらし笑れつゝ主従宿所へまどひ入りぬ

第十五

衆悪をつめて長き夜　孝女缺皿ゞ法會の功德

片境いかゝとぞ思れける衣更あくるとて真吉と罵れども後難は如量れど。
慮果べきるかゝ孫ゞ良人ゝ云云と告る折味噌甕ゝ麻衣の泥を拭ゝ障子を
引開ゝ立返せるひゝ鮮魚いかゞ仕ん。そや臭くうるゝゝ果ぐ
片境ゝ凄くうえゝて。ゆる置やそれ何ようせん。夜長の腸ゝ行もゆ。今問
こと敢て叱られて長くゝ人く退ぬ。素大夫ゝ件の逸詳ゝ聞く驚嘆。緯
穏便ゝ似れども。ゝ妻子ゝ真吉ゝ生ん。ゝ後難竟ゝ脱ぎ。ゝ
ゝの家を相続せ。ゝ再び本領安堵ゝ。みる彼大人の吹噓ゝ。世の
常言ゝ。その冬ゝ暖ゝ。ゝ来春極く寒ゝ。ゝ祈ゝ利益ある神ゝ。
冥罰ゝ又奇剣ゝ。彼大人ゝ怒ゝ。ゝれ只族滅せゝれん。ゝ
過失ゝ。ゝ嗟ゝ頻ゝ病ゝ。ゝ嗟嘆ゝ。ゝ片境も今ゝ。ゝ

涙ゝ。ゝ要時ゝ胃ゝ。ゝ脱ゝ。ゝ謀ゝ。ゝ天目法印ゝ。ゝ
ゝのゝ。ゝ仏ゝ。ゝ横難ゝ。ゝ
秋深ゝ。ゝ重陽の佳節ゝ。ゝ苗頃畑之進ゝ。ゝ病後ゝ。ゝ
ゝ勇の宿所ゝ。ゝ賀状遠ゝ。ゝ片境ゝ。ゝ閑室ゝ。ゝ
父子ゝ罪ゝ。ゝ件の逸ゝ。ゝ謀ゝ。ゝ畑之進ゝ。ゝ
安ゝ。ゝ正木殿ゝ。ゝ盈頃の長者ゝ。ゝ
人氏陽ゝ。ゝ秦檜が類ゝ。ゝ只ゝ。ゝ
ゝ彼ゝ。ゝ寺の御舎弟義弘朝臣の陰兇なるゝ。ゝ
減ゝ。ゝ彼世婦ゝ。ゝ
被露せゝれ孫ゝ。ゝ
ゝ彼姫ゝ。ゝ

るゝふん欲某一つの計ゆり。正禾小藏人時吉ねーハ一宮の城主中て時綱ねーの任こ彼人きのふ上総う耒著せりこい耒春より伯父ホ代りて當城を伐らゝ
なり。いまぐその宅地ゐゝれば城の南門を旅館ふせるつぶ赤山世弟を小弟人の
旅宿ホ進ふせなゞく真間の別荘をりて宿所ホせんと願ひまゐらぶ正禾の一族
かゝのゝぶ欲びまひうん欲ぶとゝハあゝれこの為ゝ弱ゝこれ人情のつゝこの為
成ゝぶ決ーて安異こあの為成ゝぶどゝのゝ危ーすぶ試こふ言を弱ーて安危を
トまゝ人ゝーと真成ふ密語ゝ片塊只管稱賛ーー吁つぶ增ハ才子なりこの計
極ては。さりゝれども彼別荘ハ檐傾ゝ壁毀ゝ毋屋ハ人の住べくもあらぶ。つぶ叔父の
起刮ーのふ子亭ハいと陝きホ親子主従十餘人いるゆーて膝を容べゝこまこ
又難儀ありとゝぶ畑之進うちほう弱ゝ我ゝとゝるホ足ゝぶ舊宅ゝゝぶ
速ホ復覆ーて移徒ーまゝ雜費ハ力の及ん役某凋達つまゝーんとゝく思ひ

起ーまゝと叮嚀ゝ勸まゝぶ。片塊ハ限りなく欲びゝ良人ゝ墓より退ゝを俟ゝ。
遂ゝ此此ゝと告ーゝぶ素ホ大夫此ゝを為ーー。猛ホ天目法印ゝ招ゝよゝせゝ。
普請のゝを任用ーー夜を日ゝ徒ゝくらゝそゝじ立れば九月下浣ゝ至りて壁ゝ塗ゝ
いまゝ乾ゝ終ゝ大ゝゝ成就ーて。その数寄今の為ホはゝり。かゝて素大夫ゝ一封の
願書ゝ写ゝ城外の茅ゝ以小系人ゝ旅宿ゝせゝれ人ゝ。その刃ハ真間の別荘へ
移住せゝゝくゝゝ。いと叮嚀ゝ伝ゝあゝれ時綱軒くこれゝ許ゝ。
乞ーゝぶ。ゝゝゝゝて許容ーてゝり。素大夫中ゝやゝ伝ゝ十月二ゝの日ゝり。
三日ゝ間雜具ゝ運ーー。五日の旦移徒せんゝゝ又ゝのゝ為ゝ伝ゝ。
四ゝの日運送の宰領ホ宛ゝられゝる味噌平ホ走りゝりて息ゝ吻ゝゝゝ
ゝ。某ホきのふのゝく雜具ゝ新宅へ運び入ゝんゝゝ思ひしホ叔父の
ゝしゝゝゝ奴隷十人ゝゝり。ゝゝゝゝ門ゝり出ゝ勢猛くゝーー。

作麼生ぞ何処より来れると問ふ膳と接ぶ。如此くこと答ふ。彼真吉ら
いふ媒妁人奴隷ゑ下知して声をあり立て這奴ぞ甚狼藉くこと何処とおりし
迷つる。正禾左金時忠ぬ。由緒ある別荘あるべく。昨月往くせまひしとも
ざるや。そく逃れと敦園ぬ。真吉
ととと論ずるふ物ぞいつせいつぐ。日を閉せ髻結の数々まで乱打ち奏れり。
勢ひ當りがたく見べ牛を牽捨車に奏れ食逃えりと端く出ぶ素大夫が
周章いべさ〜〜。庄城へ入の人ぞ。されば一七日の遅恨を去り移く復さと
しん。去るまでも正禾大人既ゑ許させるひる。移徒を今ゑふ妨らく良やらある。
真吉ら悪視なふ今ゑそ。あねとぐ。そふ中ゑ左金殿ゑ腹ゑ思ひたのと
なり。いふ来べと罵り狂ひく。味噌平ゑを東西ゑ走じて。叔父と塔ゑ白さるふ。
天目法印ゑ擒ゆやせ〜れん。往方ゑ行くもれどとふ畑ゑ進ゑまふとの
金園ゆて後合ゑそ。そ中ゑ畑ゑ進ゑみ出。この期ゑ及びて長食織ゑ金ゑ
明く地ゑ時綱ぬ〜人愁訴の人とふ素大夫この織ゑ往ひく忙く堂へ参りて。
正禾時綱ゑ對面。愁訴の趣を述べる時綱ゑてうち驚て。この一切ゑ期
せざる。ゑれども故ゑ人の別荘を左金ゑ奪ひぐるゑあべ。且退て候ゑ彼
ゑの音と問く。計ひべと返答ゑ素大夫ゑ申ゑ呂大人の威徳を
りて。放せゑ人放せゑとらひあ人ゑ涙さ〜ぐて退出つ。且て又堂へ参りく。
その氣色ゑ窺ゑ時綱ゑ人ゑりていゑとふ。左金ゑ仔細をゑ問ゑゆくぞ彼
別荘ゑ正〜ゑ券書あり。外人のゑるゑふあふべとなん。みづゑ問ゑ分明
ゑ〜ん。といふ〜さん。素大夫ゑせんとぐゑ。ゑて堂ゑ出夜をこめて真間へ
赴ゑ左金ゑ對面をゑ〜ゑ真吉出迎へて客房へ誘引ね当下ゑ正禾左金。
屏風の後より遠り出く。素大夫ゑ對面。曩ゑ當所のゑゑゑ堂へ愁訴

せられしよし。縊らるゝに似て、ちゝろゞとに柳らの別荘ハ。正しく券書を相伝せり。外人のあるべきにあらねど。是ハある人よりて披く。券書をこれバかの養父梁右衛門職之より。女児鮮衣へ相伝し。鮮衣ハ又これを楓に伝ふるとおもへ自筆の奥書あり。さらバ此しても、あの人の所為なりけんと疑念ハ秦の系の如し。さもその所以を質さんとも。なぞて実を告ぐべき人なしとみえバ、更にもすべなくて、阿容々として宿所よかくまへバ細之進も。倏になり。丘垅紅皿のわたりにいけるぞやと尋ねしバ素大夫ハ面あげて、紳の趣を説きて、誠に真間の別荘ハ養父が退隠の地なり。是を購めし死後より鮮衣が紅粉料にあてがはせんとて奥書を送されしなれバ上総にありしと。思ふところ、後あたりなく真間へ退去られハ三年の旅寝し、鮮衣狂死するに及びて彼券書のある処をしらず。此比ちかく、あまりにふれど、その人死しては間にすることもなく年も経にけり。

今彼人の手に入りたる。不思議といふもあまりありとて、ところ方に露はれぬ。證据なられバ今更争ひがたし。進退ここに究りぬと大息つきて物ぐれは衆皆頻りに胸のみたゞれて、或はうち泣き或は罵りなどして夜を明させしが小厮人が私卒ホ葉をうけ取らんとて来りしに素大夫はいひがけて、ここの大間の別荘を左金まで取られ、今亦あれを小厮人にあけわたして出てゆかバ五番も持ざる野ぶせりになりなんとてよへども。豫てよりげなと定めし後徒を侯と勧解しも許べからずバとやせまし。かくやせましと相譚暇なくあつかふれ煩悩ハ時のまにに種細之進も呆れてぞなり思慮竭て毛を吹疵を求むる後悔そのかひなかりしかども、なぶ要時はあるまじき欲小厮人が私卒ホなどもあしらへてこれよりしとて味噌すり、がすバ。彼ホハもや還らずん新ぐもえゆるぞ跡にはかの帖仕舌を迷ひ、躯くきし出を遽しく封じたる衆皆聚合てこれをみれバ思ひがけなく素大夫へ

左金を贈る書簡くその略に。荊婦が宿願と果さんとて。今日亭午。真間山の麓
なる。落窪禅寺に千て大施餓鬼奥行を因て。今政令弱を携畑之進夫妻と伴ひ
速に来會ふべし。怠々不宣と。読了ほて片埴い冷笑ひ。大盗が両三遍紅唇を弄ひ
吾倅よ赤恥かしくも。なほ飽ぐ絶維る欲維がこれを実とさべれば叔父公も能奴を
殺されん肩毛慄てとらせよと良人のうさを見えるまで。素大夫且く沈吟ぐ凝ひいさる
となれども。宿所を奪れ。雑具を喪ひ。進退既に究まれば。彼寺を死ところと思ひ
決めてこれをんとそもかくても正未殿に憎れて世に立がたし。と舌ち鳴せぞ。
畑之進。母を。書簡を巻て。宣ふ所至極せり。今朝こや弟を受こんとく
来るるのは小義人が。私卒ふ和ふべ。これも又彼人が懲さんとなる。溝し欲
利害いまぐ決むべくぞ。一度び虎穴に入ざれば虎の意をもるふよりなし。
法會ふ赴ひる人某い宿所へ選り。唐草ふを伴そ彼処に待そまうん狐疑

そて後悔ふるとと叮嚀ふ説きそて遽くかへりふるべ。片埴も已とをるを
紅りうとも衣裳を穀に味噌平ふをれて素大夫の後ふたく。落窪寺へ赴けば。
山門のほとりあて畑之進唐草ふよりあひ唐草いきのふり親ふのこの
ふ入こ涙痕いまぐ乾ぐ。後者ふを退くと親同胞を問慰めもつれぐ。
玄関より進み入るべ知客の僧出迎へく。本堂へ誘引つ。備の席にさそり中央
ふハ餓鬼棚を飾ふて過去七佛の幡を掛向ひて此に引入る処に翠簾屏風
建続ひしされば。定うふハんえどもつふ左金ふをるるべ。彼此に引ってこ
慢幕ふハ正未廻橋両家の紋を染りいりるもちなりけんと素大夫ふ流し。
且こて数声の撞を撞鳴せば僧衆四五十口廊より移り出て並こ座くして間
左右に列坐せり。當下住持擬四和尚紫衣に錦の袈裟衣掛て左右に侍数統ね
右ふ母ハ拂子を拠合ふ沙弥行童を前後ふ立て本堂へさそみ入り。佛を拜

なりて、まづ倚子をかまへ、僧衆ちの〳〵経巻の紐を釋く。異口同音に読
む。鉦鼓音声句〻節〻、誰か心耳を澄ざるべき。今ぞ真文を患る素〻丈夫
もりつどひ、七情の固を晓り、三宝の墓に遊び、慈悲の雲霧を拂て真如の月を
みるまうらと妬ぐ。怨を僻で疑ふ片端も醉うがごとく、醒うがごとくに、
くみて陸喜合仰せざるところ、読経衛〻抗ろ比擬。四和尚は倚子をとられ、餓鬼
棚よりも對ひ声高に引導をそ。その渝に曰、夫倩惟るに地獄天堂眼前に
在り。餓鬼畜生豈外より他をりのるべんや。十悪も一念より生じ、三宝も一念より
致を益大施餓鬼は孝を述恩に報ひ、若を救ひ楽をもるの要なり。ひとし目蓮
比丘その母餓鬼中に生ざるをみて、仮を鉢に盛往てその母に飯を食いまぐ
口に入るに、化して火炭となりて終に食ふことを得ず。目蓮いたく哀を天に叫び走
巡て世尊に白す。世尊のたまはく。決ず母その罪重一人の力をもてよく救ふ所に

あらずと。當に十方衆僧の威神力を募べし。時に七月十五日。七代の父母現在の
父母厄難中みあるりの為に五菓百味を具へ、盆中に置十方の大徳を供
養せり。尒時目蓮の母餓鬼の苦を脱ることを得たりとふ。今の盂蘭盆
則是なり。于蘭此云ふ懸倒とふ。盆を乃器なり。今日の法會又これと同じ。
その時に、ひろくひとしくも他苦に定日。豈唯肇秋のみ。うんや。施主大檀那。
正未左金太郎時忠の室某氏七代の父母現在の父母有縁無数餓鬼
中に墮るものの為に五菓百味を具大徳衆僧と借請して將ふその苦況
救ふ。このり明人宋素卿前妻唐氏その子韓拭児沙弥寂念無頂堂六
妬婦根坂等。今この孝女の功徳に因て火坑を出苦海を去り速に仏を受よ
弥陀仏〻と念じつ。又偈を説て一遍鉢を把て水を決だ盆を洗て飯を飯一
〻壇上壇下唱て集り食ふのあるが如し。時に衆僧科一〻杯を拍。

経を誦し棚を遶ること数百遍紫雲一山たなびき引白蓮花四辺に薫りぬ現然す火
得脱をとゝなえそいと憑し法會既に果て擬四和尚八施主に一渇を乞
引く方よゆゑ入りの分くて素大夫ホハ知客の僧に導き客殿に卦くれぬ
荘柄真吉これを迎へて賓座に誘引バ左金八礼服を整て上座にをり綸の
小袖長袴黄金造の大刀さゝゑ髪けを晴とゞ打扮たる白して頻邪直り眉
秀く唇朱く房総一の美男く素大夫片埴ホハこれをうく媚〻とゐゑ接ふ
おそれ頓首するのさまとゝろ当下左金八遠く席を譲りて上座に推とゝ
俄頃の招待萬支を図親戚ゝゝ内ゝ集れ立ち居の圓居に入りのゝと歓び
何うこれはまことゝたまづあり進をるものあり食いうゝといそがせば真吉八内と
志つ隔の慕襖に左右へさつと推ひ〻くをとゝれバそひゞけの元鉄皿と白綾の
袿衣襠〻く白小袖六り七り聖のどく被る〻る黒髪の長〻て萠蘭る愛敬

づ〻く匂ひこゞ〻ゝる空炷の薫りに相ひ疲〻る雅技の梅今をるべと
別るゞ如し。そゞ後方ゆ付るりの涙るなりこれさゝ往衣襠〻る御達めて〻
形容ゆゝあゝゞ左右ゆ你毋二人おの〻嬰児を抱く〻りこれ〻ゝゞほとりゆ
引添ゝりのゝ天目法印浄弁ゝ〻ゝ緋の法衣ゆ境内篠掛て聖鞠の大刀を佩り
又その次の房ゝ婢仆十人ゆ〻ゝ〻ゝ〻ゝの袿下襲して紅の如く列ゝ〻ゝ
いゝゝとゞりゆ素大夫ハ片埴と面をゝあゝ唐草紅盃畑之進ゆ頻ゆ月のみ
うち駭ゞく夢ゝ現うと呆れまどゝゝ〻ゝもそゝゆゝと天目法印席上ゝゝ
出く素大夫片埴ホゝうち對ひなゝりゆゝとゝひゝん鉄皿ゝゝゆゝ波ゝ
ゝふゆりゝれ你連ゞ惑ひを釋んそのゝゞゝれゝ口素大夫ゞ〻ゝ情
ゝゝゞゝゆゝ孫ゞ片埴ハ女児ゝゝ共再會して後ゆ稚ゝ孫ゝ
症良人を侮る頑嚚長舌ゝゞ養ひ日ゝ仆ゞおのゞ女児を愛ゝ

南無寶勝如來
無多寶如來
無妙色身如來
無離怖畏如來
無甘露王如來
南無阿弥陀如來
天目法印
畑之進
素大夫
素卿
真吉
左重郎

家の血絡の鉄皿が孝行あさからぬ。しらく憎み虐げ不慈非道を知らず。素大夫の妻よあそれく一言半句懲し給ひ彼も此も仏の子なれば夫婦なれども又縛なれば姪を罵りあるを罵りみづから鉄別荘へ退隠し。外うづら鉄皿が患苦怪情むとへちらくで片蔭窮子吾儕を拒たて鉄皿が罪を数へ且渠を嬲こく果は拝女よ信玉といふちうろ沼ちうと輙く諾ひ今この仮宜よ遠ざけこそば継母が毒手を失玉へとちくべ安で惜字紙葛籠へ入れなく紐く脊負生を引ちぶめんとて追蒐る波多が心掘が豫さよりよくちりん新利根河原へ誘引くるが心中の機密を告るが波多が感涙を拭ひて主の艱苦怪敵人為真吉と相潭て左金ねしへあらせしは渠が意中の機密をあらせりちうよ。ども片蔭が追ちく窺ふとりやとらくべその夜の闇み乗しく波多が泣叫せ。

巨石を河へ投沈めて彼ホハ入水せしとちらせ竊ふ鉄皿波多が左金ゆしふ贈しが。正の殿堂ひして鉄皿が孝を稱賞るが孤忠を賛これが就ても昔これ素大夫孤媒嫌して継母氏の後とせしは生涯の過失なりれ渠が妻あり子さあり。その方を捨ぶとしても離別せしのなしぬふ後ずちひめぐふさぐしんを鮮衣を誣るなり今その女児鉄皿が百折千磨の患苦を受るも禍胎これより生まれり加旃月殿の大刀再び宝庫へ入りし鮮衣が大切されども。その遺言を員がくそこのる後く守へまうきびみる素大夫が切とせりこの二不孝は時個が手来こうふ愉うびちうぼく今をこりなく鉄皿が厄と被たるが子の婦とるのなくぶ死しその後も鮮衣ふ新護とは親の栗さ孫子ゆしあれば誰ま乞ひ誰ふづ生れ。只このまに婚姻をとり結びゆへとそ。その飲びの大さなるぶ縛の序波多を真吉ふ妻しるへ主後はあず夜ふ情愿を遂さりたさる行ふ片蔭ハ見定めさる

ことゝもなく缺皿ゐ密夫ありとて活き死しを責られども欲ゐ迷ふに皿と左金ゐよ
あらせんとそうことや親の口づから不義淫奔を誨さは緯の妻ゐ渡るゐ渡るゐ
告しらべつれつゝとやゐ今その悪を懲さんが死して必地獄ゐ落ん御りや
あると左金ゐ真吉ゐ相潭べ缺皿ゐ
房総第一の醜郎なる王の眞をそのうして紅皿ゐあらせしらべ因果の亂をそや
生て女の子を送を左文太が枉死小素太郎が早世も片埦ハ只缺皿ゐ崇と
ゐくどさんあらべ。これらの由ハ次ゐ説人抑輪回応報ハ生前死後のゆのうらべ。
いねる日片埦紅皿ゐハ苗頃訴赴くとて悔く缺皿が無物の戸へ泥と跳うけ。それと
ゐ〳〵紙べ阿容〳〵と泥の上ゐ額著勧解く。こよるき恥をかゞやせ。ゐ是孝女と
むゞゐ〳〵ゐ泥ゐ生く汝ゐ返ゐ目前の悪報ゐ故ゐるゐ片埦ゐ〳〵時ゐ
似ゞゐ〳〵ゐの僻ゐもその良人が憂苦ゐ沈むもゐゞ〳〵死灵の祟ゐ。ゐれども

神明佛陀ハ必ゐ〳〵ゐ〳〵新御堂の金剛神ゐの里ゐ見名の神。
缺皿が為ゐ赤縄を操り見ひ。死灵ゐ〳〵ゐるとさくゐ夢蘇ゐ告ゐひきとれゐ
よりて缺皿を継母氏の菩提所なる弘法寺ゐ法會を奥ゝ。祖父忌実四十七
ゐが冥福追善の為千部の法華経を供ゐ〳〵せり。片埦ゐが逢ゐ〳〵ハ則是
この日〳〵ゐより先ゐハ婢們を毎日ゐ一両人遣して墓へ香華を向しべ
片埦ハ缺皿ゐが寃鬼の所行ゐ〳〵人と云〳〵又この宗寧語ゐ信ゐ
正系氏の祈願ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ施餓鬼を奥行して父素太郎ゐ
祖父素卿が〳〵ゐ〳〵妻又明國ゐ送せ子兄の祈願ゐ〳〵ゐ
根坂ゐが三熱の苦を救ひ〳〵ゐ怨灵さべて法りゐ是併禅機ゐ法を結く
孝を助し左金ねしの賜く仇ゐ〳〵ひまひそと精細ゐ説ゐ〳〵せべ左金時忠ハ懐
より彼券書をとり出し相佶しのゐ別荘を押く難義をひひみをと惜しと

ゆるれくんさうとて本心ちうほよあくべ。悔くその非を改めくとそふぞうのすこ
ちうれどもこの券書某がまゆ入るくゆるろ行ぐくいひあるとい欽四を徳とに
惜字紙葛の形より出ひたる亦是奇しれるゆなんとそもりくるろで待ゆ帰て
難くやあるんと鬼胎を抱なく故ゆるく小姦人を宿所をりぐくんと願ゆるとも
つぐ父いりでう媚を突べた今こそ返しまあくもれ城外の筆もそぐゆく別荘のろ
とも領しゆるくと叮嚀ゆ述べた件の券書を素大夫がほとりゆ閲れこの欽四が
勘當を待しゆるぐ孝道ゆるく全くんん苗頃夫婦往四ゆ察辭を添てゆるとと
他ゆるくいくべ畑之進唐草紅皿ゆるともゆ刃のおれ亦なれまでゆ愧く額ゆ汗
そろのこ素大夫ハ感謝ゆ沼堀ゆ頻ゆ涙をちちゆめ片城よくと注沈こ浅ゆや
そろうしゆ物の障礙ゆ心乱きて傳稀ゆる孝行の養女を寃しゆれ昔の人の
迹を徳榕なれや真間の里ゆゆ徳母の滅ゆ引まんとこそ悲れ祥さく

とゆくべ吾俤こそまを合して拜こゆ賠法もせん噛ゆるゆ所天。かゆ寛を
産ゆるひし鮮衣どのゆ美しい面目ゆるやと声立く歎く滅ゆ鉄四ハ落ゆ涙を拭ひ
あくゆ物体ゆくて宜ゆるゆ出ゆるゆ悖しゆ親ゆ事の疎ゆる刃の忌ゆ付ゆる
りのと神の示現ゆあゆるくゆ。もん汗を受ゆて妹使の縁を借びくゆ又いゆる
日の達途ゆ後者ゆがいゆるしくそれゆる進止ゆ罪いくゆしくゆ脱ゆるべた
さりとて多ゆめゆゆゆゆ。ゆ尺ゆ慈愛ゆくゆ天地ゆすんゆ恩徳ゆり汗させく
とかれ口流べ真吉も流ゆゆ刃のほどくゆゆ非を責くゆ勸解ゆて。勸解ゆ
ことゆくと畑之進唐草ゆハ此彼を慰ゆ勸り親子同胞和睦せしその乗ハ
融々さり旦して正禾左金ハ妾見ゆを指しゆ。男姑のくゆ小藤を向鉄四ゆ
三年ゆ行ゆ子どもゆさり産ゆひた太郎ハ二弋次郎ハ當歳ゆ物数ゆ
ゆくほど生ゆく健ゆり小素太郎を喪ひくゆ。ゆゆそくまさん欽二郎ゆ七ゆ

ならん守のめへきくうかし。彼が継嗣肉縁のゆゑん嫡孫義祖せられんか又缸皿
れ家の爲更ふ媒妁さへれ人あり。氏族小笠原時吉を一の宮の城主ゝして此
時綱が代ゝ當城の大将をうけたまわりぬ所領人品左文太が類すくなからず今ことし
廿八歳なるべし。ちか比妻を喪ひて再縁を募るゆゑなり。いぬる日某彼人ゝ件の婚縁を
永締しふ一議ゝ及べざらけ引ねり。妻せんとぞいふなら左文太が産せし女の子ハ鉄皿
これを養んとまうしく某又政田が親族の子どもを目撰で守へ願ひたまふせ。此
彼人となるふ及て彼女の子を妻して左文太が家督を与へん。抑との三ヶ條ハ父
時綱が意中よりいでたり。いかゞあるらけりなふべしやと貞成よかくて素太夫も片
いなぞなされを擬議させられ。紅皿が欲びハ笑る面ゝ見れて箇頃夫婦ありし呉ゝ正禾親
子が誠心感佩し。これも又鉄皿が孝心の餘徳なりとく稱賛をかくて左金鉄皿ハ
親族外戚を伴ふてまを退出んとちう行ふ旅瘦ゝ体一個の法師。迎へきたりて

跪え貪道ハ武蔵なる吾嬬村の荘客ふ杼二郎平といひしものゝ。如此
よふよりて九ヶ年已前頭を圓め。六十六ヶ國の靈場を拝りなく順拝しふ
もりしばもそく詣て大施餓鬼の法會ふあひぬ。いかなる由縁をかしはしてなる
妻根坂が菩提さへ吊せめのひろんこゝろなるがくれと同ハ素太夫をときう。例之が
人魄を打落せし縁故鮮衣が枉死鉄皿が純孝。その緊要を説示せば杼二郎平
法師感涙を禁めあへぞよふ有がたし。仁人孝女ふ邑ひとげるゝ救恩し根坂が得脱
疑ひなし。かくは御法ふあひたまりし貪道も前世よいかなる縁ありて結びたん。減ぼ
功徳なると賞歎し。手を合して法まけ。左金ハ渠が老たる状態を侍
落霞洼寺の園丁ゝして。それハ是よりあつさ村をとぶめ。手次歴て大往生
とぞかくて又正禾左金を鉄皿が爲ふ。る見名の神社を造りたてまんて
明年の春父時綱とゝもに上総へ還るふ及びてまぬかなく。金剛神へ参詣しく。

急くべきまでに忠孝の志を移さざるべからず家に餘の慶あり。真吉は長父丁七が忠義を追て賞せられ守の近習に召出されて禄二百貫宛給はる。

浪人の子ども髮産して長成れば春をのべ迎へ素大夫も上総へ召されて弘の嫡男松王丸は扇ぐのひ船姫の傳をうけまゐらせて禄百貫を授かり紅皿を小菊人時吉が後妻になりて城主の内室と仰ぎ一男一女出来て政田左文太が産しる女の子を鉄皿に養れて人となり左文太が長子左善二某が妻まゐらせ唐草の子どもまゐらしべ畑之進が五十の春真吉が三男を養ひて家嫡とし天目法下の祈雨の功によりて金剛神の別當に補せられ九十餘歳の上壽をたのしむ又彼正禾時綱は元来根古屋の城主なり。その子左金太郎時忠は那古の城をまゐらせて父子ともに君を補佐し良臣と稱らるその家ゆゑ栄しくぞ古浦よりぞや積善の家に餘慶あり積悪の家に餘殃あり。

素大夫が沈落はその父素卿が不仁に起り徒樂の家の栄はその女鉄皿が至孝ゆゑなり。鉄皿が幼にして親に事へ上に継母の不慈なるありとも竟に慈母となりて和睦繁昌せしに疑ひなし。宜なるかな天道は盈るを虧くべく鉄皿の満るとは温ぶべく老氏の所云不爭の德是なり。試に問ふ童男雅女紅皿を取るべんか鉄皿をとるべんか。これ鉄皿の虧るを取るべきの他意の要領なり。本重

四四御談卷之八大尾

編述　著作堂馬琴稿本

画匠　前北齋載斗筆

文化十二年乙亥春發販
安政五年戊午秋補刻

東都書林
浪華書林

大傳馬町二丁目　松本平介
心斎橋筋本町角　榎本惣右衛門
心斎橋筋博労角　榎本平吉
河内屋藤兵衛
河内屋茂兵衛
釜屋又兵衛
丁子屋平兵衛

新編水滸畫傳

全部九十冊出來

近世水滸傳流行ふ及び草紙錦繪の類迚多しくのへがらも博識君子の外兒女童蒙ハ其原始と知らず。故ゑ曲亭馬琴翁と高井蘭山翁の兩先生才力とりて唐本百回を翻譯し國字ふ和解て。文中ふ葛飾北齋先生の筆力を尽されたる圖を加へ兒女童幼しらとも讀得安く見ふ目を歡らし誦ふ食と忘る程乃面白しいう。昔時宋の政みくるも。小人姦邪朝ゑ満。正人忠直の士ハ野外ゑかくれ有志の者い損作せらるも如何此叮嚀ちう史筆亦時ゑ誦て後世と欺事多ゑよりて羅貫中水滸の豪傑ニ比て大宋の嘉祐三年。大尉洪信とつへる者鎖魔碑と發てしゆ。三十六員の天罡星七十二座の地煞星合て百八人の英勇顯ま種々の怪異奇事いう小説と著述し未曾有の大部とつへども北齋先生の名恵。曲亭高井兩翁博識卓見の才力とりて和解者客恵ニ儀事

あく。見ぬ唐土の地理官舎人家官名ゑ至まで。衣居巨細ゑ知る故に雅俗の差別ちく讀得て甚益ゆる實ゑ面白無比小說なり

産科發明

全三冊出來

房州富山奥澤先生著

奥澤先生ハ産科ゑ心を用事信節ゑ。和漢の産學ゑ長し曾而牛馬猪犬の類ゑ至迄悉解体し。雄娠の臟腑子宮乃備姿或い人躰の胎元幽冥ゑる處ゑ。婦人の腹状を推て妊娠の日を知る事ゑ。十月の間人躰の子宮ゑ成育ゑる事。月々ゑ解解し諸の難産治療の經驗方。産前産後の心得數条を數ゑし曾而先生産婦と治療有し人々の。村里性名を顯し其療ゑ委諭し乳汁乳疾の治方。妊婦濟生乃信を專ゑ致されゑ。醫家ハ元ゑ素人ゑ。一度閲して妊娠の極意を會得せバ子孫相續の基を知ゑ。凡産科の書多しゑ。此右ゑ出るゆゑ古今未發海内無双の新書也

曲亭馬琴翁
高井蘭山翁

唐本百回本新譯水滸傳全九十冊出來

初編 十冊

自卷之壹 至卷之十

○張天師祈て瘟病を禳ふ ○洪太尉誤て妖魔を走らす
○王教頭延安府ゑ走る ○九紋龍史家村を鬧す
○史大郎夜華陰縣ゑ走る ○魯提轄拳て鎮關西を打
○趙員外重て文殊院を修す ○魯智深大ゑ五臺山を鬧す
○小覇王醉て銷金帳ゑ入る ○花和尚大ゑ桃花村を鬧す
○九紋龍赤松林ゑ剪徑す ○魯智深瓦罐寺ゑ火燒
○花和尚倒ゑ垂楊柳を拔 ○豹子頭誤て白虎堂ゑ入
○林教頭刺されて滄州道ゑ配る ○花和尚大ゑ野豬林ゑ鬧す
○柴進が門ゑ天下の客を招く ○林冲が棒洪教頭を打
○林教頭風雪山神廟 ○陸虞候草料場を火燒

貳編

十冊

自巻之十一
至巻之二十

○朱貴水亭に號箭を施す　○林冲雪夜梁山を上る
○梁山泊の林冲落草す　○汴京城より楊志劍を賣
○青面獸北京にて武と鬪ふ　○急先鋒東郭にて功を爭ふ
○赤髮鬼醉て靈官殿を卧す　○晁天王義を東溪村に認む
○吳學究三阮を說て撞籌せし　○公孫勝七星を應じて義に聚
○楊志金銀擔を押送す　○吳用生辰綱を智を以取
○魯智深二龍山に單打　○青面獸宝珠寺を雙奪
○宋公明私に晁天王を放　○美髯公智を以挿翅虎を穩寺
○林冲水寨にて大火を僦ふ　○晁蓋梁山にて小旗泊を奪ふ
○梁山泊の義士晁蓋を尊ぶ　○鄆城縣の月夜に劉唐を走じ
○閻婆醉て唐牛兒を打　○宋江怒て閻婆惜を殺す
○閻婆大に鄆城縣を鬧す　○朱仝義を以て宋公明を救ふ

○横海郡に柴進客を留む
○景陽岡にて武松虎を打　○王婆賄を貪て風情を說
○其下　○鄆哥怒ずして茶肆を鬧す

三編

十冊

自巻之十一
至巻之三十

○王婆西門慶を計略す　○潘婦武大郎を茶鴆す
○鄆哥大に授官廳を鬧す　○武松鬪て西門慶を殺す
○母夜叉孟州道に人肉を賣　○武都頭十字坡に張青を遇
○武松威安平寨を鎮る　○施恩義を以て快活林を奪ふ
○施恩重て孟州道に霸う　○武松醉て蜻蜓兒を打
○都監張蒙方武松を陷る　○武松大に飛雲浦を鬪ふ
○張都監血を鴛鴦樓に濺　○武行者夜叫蜈蚣嶺を走る
○武行者醉て孔亮を打　○錦毛虎義を以て宋江を救ふ
○宋江夜小華山を看　○花榮大に清風寨を鬪ふ

四編

十冊

○鎮三山大ゑ青州道と鬧す　○霹靂火夜瓦礫場ゑ走
○石將軍村店ゑ書と寄　○小李廣梁山ゑ雁と射
○梁山泊ゑ呉用戴宗と拳　○揭陽嶺ゑ宋江李俊ゑ逢
○没遮攔及時雨と追趕　○船火兒夜潯陽江と鬧す
○及時雨神行大保ゑ會す　○黒旋風浪裡白跳と鬧ゑ
○尋陽樓ゑて宋江反詩と吟ど　○梁山泊戴宗ゑ假信と傳ひ
○其下　○梁山泊の好漢法場と劫ル
○白龍廟ゑ英雄小く義ゑ聚　○宋江智とりて無為軍と取
○張順黄文炳と活捉　○還道村ゑて三卷の天書と受
自卷之一至卷之四十　○宋公明九天玄女ゑ遇ふ　○假李逵の前徑單人と劫す
○黒旋風沂嶺ゑて四の虎と殺す　○錦豹子小徑ゑて戴宗ゑ逢
○病關索長街ゑて石秀ゑ遇　○楊雄醉て潘巧雲と罵

五編

十冊

○石秀智とりて裴如海と殺
○病關索大ゑ翠屏山と鬧す　○揮命山火とりて祝家店と燒
○撲天鵰生死の書と雙修ル　○宋公明一ゑび祝家莊と打
○一丈青單王矮虎と捉　○宋公明兩祝家莊と打
○解珍解宝双て獄と越　○孫立孫新大ゑ牢と劫ル
○呉学究連環の計と双用　○宋公明三ゑび祝家莊と打
○挿翅虎拳とりて白秀英と打　○美髯公誤て小衛内と失ふ
○李逵殷天錫と打死ル　○柴進高唐州ゑ失酒す
○戴宗智とりて公孫勝と取　○李逵爺とりて羅真人と劈
○入雲龍法と鬪ひて高廉と破　○黒旋風穴と探て柴進ゑ救ふ
○高太尉大ゑ三路の兵と興ル　○呼延灼連環馬と擺布す
○呉用時遷として甲と盗む　○湯隆徐寧と賺して甲と盗む

自巻之四十
至巻之五十

六編

十冊

○徐寧教て鈎鎌鎗を使しむ
○三山義と聚て青州を打
○呉用金鈴吊掛と賺す
○公孫勝芒碭山の魔を降す
○呉用智てりて玉麒麟を賺す
○玲箭を放て燕青王を救ふ
○宋江が兵北京城を打
○呼延灼夜月関勝を賺す
○托塔天王夢中に聖を顯す
○時遷火てりて翠雲楼を焼
○宋江馬歩三軍を賞す
○宋公明夜曾頭市を打
○宋江大に連環馬を破る
○衆虎心を同じて水泊に会す
○宋江西岳華山を闘す
○晁天王曾頭市に箭に中る
○張順夜金沙灘を闘ふ
○法場を劫て石秀楼を飛
○関勝議して梁山泊を取んとす
○宋公明雪天に索超を擒ふ
○浪裏白跳水上に寇を報ず
○呉用智てりて大名府を取
○関勝水火二将を降す
○盧俊義史文恭を活捉

自巻之五十一
至巻之六十

○東平府を誤て九文龍を陷
○没羽箭石を飛せて英雄を打
○忠義堂の石碑天文を受
○柴進花の簪して禁院に入
○黒旋風喬鬼を捉
○燕青智てりて擎天柱を撲
○活閻羅船を倒して徒酒を偷む
○呉加亮四斗五方の籤を布
○梁山泊十面の埋伏
○十節度使議して梁山泊を取
○劉唐火を放て戰船を焼
○張順鑿て海鰍船を漏しむ
○宋公明義てりて双鎗将を識
○宋公明粮を棄て壮士を擒
○梁山泊の英雄座次を排す
○李逵元夜に東京を闘しむ
○梁山泊雙て頭を獻ず
○李逵壽張を奮て衙に坐す
○黒旋風詩を排て飲を罵
○宋公明九宮八卦陣を排
○宋公明再童貫を擒
○宋公明一高太尉を敗
○宋公明兩高太尉を敗
○宋公明三高太尉を敗

七編

十冊

自巻之六十一
至巻之七十

○奬青月夜道君に遇
○梁山泊に金と分て大に買市す
○宋公明詔と奉て大遼と破る
○宋公明の兵蘇州城と攻
○宋公明夜益津関と度
○宋公明大に獨鹿山に戰ふ
○宋公明大に幽州に戰ふ
○顔統軍陳に混天の象と列
○宋公明夢に玄女の法と授る
○宿太尉恩と領て詔と降す
○双林鎮に燕青故に遇
○盧俊義黒夜に敵と賺す
○戴宗計と定て蕭讓と賺
○宋公明賺て金に招安を受
○陳橋驛に趙匡胤と擒し小平と斬
○盧俊義大に玉田縣に戰ふ
○呉学究智とめて文安縣と取
○盧俊義が兵青石峪に陷
○呼延灼力番將と擒ふ

八編
十冊

自巻之七十一
至巻之八十

○蓋郡と打智多星の密籌
○宋江兵と両路に分
○李逵が暴衆人と陷
○喬道清の術宋江と破
○入雲龍の兵百谷山領と圍
○瓊英處女先鋒と做
○花和尚緣纏井と解脱
○張清瓊英双功と建
○墳地と謀て險逆と産す
○王慶姦に因て官司に噗
○張管營妻の弟に因て身と喪
○喬道清風と同し賊寇と燒
○李逵夢に天地と鬧す
○関勝義とりて三將と降
○宋公明の忠后土と感ず
○幻魔君の術五龍山に崖
○陳瓘諫官安撫と陞
○張清瓊英に配し鄆梨と爆
○混江龍水と大原城に灌
○陳瓘宋江同し捉て奏
○春陽と踏て妖魔と生ず
○龔端龔正配軍王慶と帥
○房山寨に双に舊強人と併
○書生談笑して強敵と退く

○宋江大ゑ紀山軍ふ勝
○王慶江と度て捉らる
○小旋風砲と藏して賊と撃
○宋江官と側功と成

九編

○雙林渡ゑて燕青雁と射る
○張順夜金山寺ふ伏す
○宋江智とりて潤州城と取
○盧俊義兵と宣州道ふ分
○宋公明大ゑ眺陵郡ふ戰ふ
○混江龍太湖ゑて小く義と結ぶ

十冊

○宋公明蘇州ゑ坂ふ大ふ會す
○寧海軍ゑて宋江孝と帰す
○湧金門ゑて張順神と歸す
○張順が魂方天定と捉ふ
○宋江智とりて寧海軍と取
○盧俊義兵と歙州道ふ分
○宋江大ゑ烏龍嶺ふ戰ふ
○睦州城ふ箭鄧元覚と射る
○盧俊義大ゑ豆嶺關ふ戰ふ
○宋公明智とりて清溪洞と取
○魯智深浙江ふ坐化す
○宋公明錦と著て鄉ふ回
○宋公明の神夢兒注ふ聚
○徽宗帝夢ふ梁山泊ふ遊ぶ

自巻之八十一
至巻之九十
大尾

東都川關先生著

早引人物故事

全部二冊

同 誹林冶原大人著

近代世事談

全部五冊 合巻三冊
後篇近刻

一名萬金産業袋

町家

萬實 商賣仕法大成

全部六冊
合巻三冊

此書ハ本朝の昔より近世ふ至り名將賢士
ばかり待所連歌俳諧の達人風流非優名樂
いろはを出す名ゝ人と集ふ人の所以
時代所ゝ出ひいろふ拳げの名ハ
安く化ー敵人と搜索ふ仮ふ
いと美ハ東山殿より東吳報食兼草木花果器數
万物近代未前ゑ年書帝流書画待歌連歌茶道
技藝及び美形木の起原人倫雜事年中行事
故實京ハ何の頃より初まりしこと
たゞび扨右ふ出て博識ふ連俳
此書ハ諸職ハ秘密奥儀
あらゆる形ハ國ばかり
國乃産物ハ日天ふ
備ふ諸の重宝
それ書ハ後篇ふ

手嶋堵菴先生述

女訓 姿見 女前訓躾種 繪入 全一冊

此書ハ女子七才より数回ノ[illegible]
孝行貞操の道を美[illegible]賀[illegible]
[illegible]
衣服[illegible]
[illegible]

鎌田柳弘先生作

心學五則 全壹冊

人倫の三綱 持敬 積仁 [illegible]
五則ハ[illegible]
先生五則の人[illegible]
[illegible]
[illegible]

六樹園大人譯 前篇六冊 後篇六冊

通俗排悶録

漢奇英泉画

浪速書肆 心齋橋通博労町南 河内屋茂兵衛藏版

東都葛飾戴斗画

花鳥画傳 初篇 二篇 全二冊

此書ハ秋鳥草木花景[illegible]
[illegible]
[illegible]

一勇齋國芳画

一勇画譜 全一冊

國芳ハ[illegible]
[illegible]
画譜の[illegible]
[illegible]

北齋為一老人画

繪手本水滸画傳 全一冊

此画ハ画牧老人の筆にして水滸伝一百八人乃
者像を丹精微細筆を盡し画[illegible]

抑川前重信画

繪手本水滸画傳 全二冊

北画ハ[illegible]の抑川先生[illegible]
一百八人乃英雄を[illegible]
附て[illegible]画を好む人の便[illegible]

葛飾戴斗画

英雄圖會

全一冊

山書ハ本朝英雄良將名士の肖像を各
飾大人細密に画工せ[illegible]
くれた備君の求[illegible]

一勇斎國芳画

三國英勇画傳

全一冊

呉魏蜀三國はその名高き英雄と呉
[illegible]小伝を[illegible]
人水滸画伝のごとく巻毎に[illegible]

同画

忠臣銘々画傳

全一冊

山書ハ赤穂の義士四十七個忠臣の実伝を奉て
國芳大人省像画[illegible]

渓斎英泉画

畫本錦之囊

葛飾戴斗画　全一冊

萬職圖考

初篇二篇三篇四篇五篇全五冊

[illegible]

大阪書林　河内屋茂兵衛　梓

六樹園大人著

都乃手拭

全一冊

[illegible]

新著門集

全十冊

此書ハいと古くより出
[illegible]

徳齊京先生著

先哲像傳

全四冊

先哲名家ハ多く事蹟のみにて省像の
傳ハ[illegible]
時ハ[illegible]
[illegible]
聞く雅技ふいにて曲来正し紀
省像と真跡を集め名小傳をそへ

山崎美成大人著

名家畧傳

全四冊

先哲叢談近世畸人傳
世に名高き[illegible]
言行を集録せし素[illegible]

閑卷百笑　全二冊

淡洲 建馬馬大人評

此書は霜馬大人の集る処奇と聞く人の青れ物とて都に老若男女ともうり安く世ふのなぐさみとなるべし長日の消しも夜の采暇と云のぐさとなるべし一言に実ふ是と聞きこれを机ふ笑を催やしめる厳格の人々いかゝも絶倒せざるるものなし一統に所奉百笑也

浪華書房　心斎橋通博労町角

松亭金水著　大平樂皇國性質

此書は儒者の席の説話なるゆゑ漢と説しめこれを古今風俗の変化あるひは社ふ鄙は紙うはの浅はかなるハ現或は事ども一時線琴れ説豪富貴士と称し遊宴やうるもいはんの味云その外挙てうをんなど何ごとなり雑俗比るふ説とはいまる対書ようり

河内屋茂兵衛藏板

松亭漫筆　全二冊

松亭金水著
溪齋英泉画

大の書い和漢の故事ふ依し此と對まるものと何ぐまでもなく掲け安く編ふ作者の考ぐと消し漫ふ説と備し併も少るゝわゞその雅号を漫筆といまう代なる義ハ湖上ふ文人才子之ゝ様ゝ文の道大ふ開けて事ハ尽ぬ然れとも雑事ふ至て林の木の茂深山の書紀ものつきぬ奇説珍説もこゝ尤ハ金水老人心と多年ふ精ゝ手ハれもさび一さび奉を開くふ及び枕下ふ聴一心ふのあること偽なゞ其事と奇異ものとのもるふ和もも文法雅俗の隔なく主右ふ和きゝ打ふふ二楽ゝ深ゝりの味ふびあるかくまうきハ実業業貴流の系統ふ一こゝ入るの類ひ島斡ゝや知ひあるんたゞその奉を開きそのて芸術と成こゝ人ものふ

善知安方忠義傳　第三編　全五冊

松亭金水作
葛飾為齋画

大の草子第二輯を京傳翁の佳作なる成既ふ作者ハ没故ゝ其事その逝なり閑て金水編と嗣で既ふ二編の発市ふ及び拙みの

[illegible]深甲斐守入道[illegible]の後[illegible]
[illegible]この編あり将軍太郎と重太郎不側小出おりて法[illegible]
むしとらふ一代の英雄まと千代童子赤遊[illegible]
湯[illegible]の條もむまくまと仮心[illegible]幕[illegible]前しの巻ふ等[illegible]
作者いれう扶元の翁も倶ふ兵庫向て惠[illegible]と作き奉らんかこ

繪本烈戰功記

前編十二冊 皇都
後編十二冊 東都

小澤東陽先生著
柳川重信先生著

一名甲越軍記四編五編 出來

[illegible]の書ハ武田信玄上杉謙信の接戰[illegible]して甲越の謀臣勇士の武功と
委[illegible]く奉 稱川中島戰圖[illegible]して勝敗を詳ふ論も甚外 處[illegible]の烈戰法[illegible]
の賢愚及び攻擊防禦の始末とあらはしをその中孝子復讐の美あり義士
保國の忠あり悉く記して以て勸善懲惡の一助とせん全巻繪而有
益の書[illegible]

浪華 群玉堂 心齋橋博勞町 河内屋藤兵衛梓

日本百將傳一夕話

全十二冊

柳川重信畫圖

[illegible]と本朝開闢以來 神代のことハ且く舍て 神武の皇朝より今ふ曁ふ
波西[illegible]挑なこそ三千年ふ向ともその中間ふ[illegible]
限[illegible]人物[illegible]ふ[illegible]名[illegible]ふ[illegible]
[illegible]傑[illegible]名將の事實[illegible]撰[illegible]輯むる處一百員上古ハ 神武[illegible]
の[illegible]ハ奉[illegible]勲績[illegible]道臣命ふ[illegible]元亀天正[illegible]
豐公ふ[illegible]ハ[illegible]傳作者ハ[illegible]撰[illegible]輯[illegible]
人物[illegible]德兆の中ふ擇[illegible]出[illegible]百將傳と題せ[illegible]各[illegible]ふ代の勲[illegible]
器と漢字のて銘ぜ[illegible]書わ[illegible]ふ人のよく知ら[illegible]
今に至りて作者[illegible]ふ[illegible]其文と風[illegible]
觀[illegible]せど何[illegible]小冊ふて事[illegible]

大川藍

良樂書賈

書林

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同　南傳馬町壹丁目　山城屋政吉
同　下谷御成道　英文藏
同　大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　大阪心齋橋筋本町角　和泉屋吉兵衛
大阪心齋橋筋博勞町角　河内屋藤兵衛
河内屋茂兵衛